

「社会の情報化」をめぐる段階的な研究史

— 凡庸な研究者が歩んだ50年 —

加 藤 晴 明

目次

はじめに

1 【学部時代：歴史理論への憧憬】

2 【大学院時代：社会学との出会い】

3 【転機①：社会の情報化の研究】

※情報社会を情報制度・自治体情報政策などから研究

4 【転機②：個人の情報化の研究】

※メディア論と自己物語論の接合を研究

5 【転機③：放送人（準公人）の情報化の研究】

※コミュニティFMとパーソナリティを研究

6 【転機④：地域の情報化の研究】

※奄美のメディア事業と文化の連環を研究

7 【転機⑤：文化の情報化の研究】

※奄美文化のメディア媒介的な変容を研究（現在）

8 【残された研究課題】

補足 【教育的なメディア実践のあれこれ】

補足 【調査実習 1996～2022（社会調査論⇒社会調査実習のあれこれ）】

はじめに

退職にあたってふと振り返ってみると、大学院入学から数えて47年、学部からは半世紀を超える時間が過ぎたことになる。そんな半世紀の間に、自分なりに随分と原稿を書いてきたのだが、いったい何を書いてきたのだろうかと顧みてみた。

私の場合、まず言えるのは、テーマや領域を変えてきたということだ。大雑把にみると、10年単位で大きな転進を経てきている。その変遷は、全く別物の連なりというよりも、あるテーマの解釈をめぐる自分なりの到達点に達すると、次に横へ横へと対象を拡げる。あるいは夢中で、そして結果としてテーマをシフトさせてきたということだ。そうした転進の経緯を顧みて、改めて「自分にとっての共通のテーマは何だったのだろうか」を整理してみると、「社会が情報化するとはどういうことなのだろうか？」という問いが浮かび上がってくる。

最近の多くの若い研究者は、博士後期課程など早期の研究成果で、自らの学問領域や立ち位置を明確にしている。これに比べて、私の場合には大学院での抽象的な理論研究の時期はともかく、具体的なテーマでの社会との研究的対話は、むしろ教員となった時期から始まっている。その始まりの時期は、「情報（化）社会」が学問の対象でもなく、また「メディア社会」や「メディア文化」などという語彙も流布していなかった時代であった。それ以降の経緯を振り返って、あえて段階区分して、それを言語化すれば、以下のように区分される。

【社会の情報化の研究】

※情報社会を情報制度・自治体情報政策などから研究

【個人の情報化の研究】

※メディア論と自己物語論の接合を研究

【放送人（準公人）の情報化の研究】

※コミュニティFMとパーソナリティを研究

【地域の情報化の研究】

※奄美のメディア事業と文化の連環を研究

【文化の情報化の研究】

※奄美文化のメディア媒介的な変容を研究（現在）

特徴的なのは、それぞれの段階で、研究を始めた時期には先行研究がほとんどない領域が多かったことだ。研究当初は参考文献が極めて限られた、ある意味では学問の対象となっていなかったテーマである。「社会情報学（現在では学会となっている）」や「メディア社会学」、「メディア文化」などという名称や対象もしかりで、研究の第Ⅰ世代だった。そうした各領域の初期の研究者とは、今でも交流がある。他者がまだやっていないフロンティア領域の研究は楽しい。あたかも無人の野を行くがごとく、自分や研究を通じて知り合った他の研究者たちの研究がそのまま研究史となっていく。

私の研究の中では、情報制度や地域情報政策、パソコン通信（メディア媒介コミュニケーション）、そしてコミュニティFM、島のメディア、さらに現在取り組んでいるメディア社会学の視点から島の文化を捉え直すという、自称「文化メディア学」の研究も、社会学やメディア関係の学問領域では、ほとんど先行研究のない状態から始まっている。そうしたテーマの転進は偶然の出会いもあるが、「社会の情報化」を“どこから考えてみるか”という戦略的な問いを基に対象を選んできた結果でもある。

また東京や関西の大学に所属していたのなら、同様の問いをまた別の対象で研究したのかもしれないと思う。名古屋というローカルの代表のような場所で、1人でやれる研究として選んだのが、これまでのテーマのあれこれだ。とりわけ、メディア媒介コミュニケーションの研究の後には、若者文化の研究から離れたのも、名古屋が若者文化のメインストリームから外れているからである。むしろローカルの代表としての名古屋で、ローカルな地域での情報化＝メディア社会化に取り組む方が、研究者としてもま

た調査対象者との関係においてもリアリティのあるアプローチができると考えたからである。

そのため、コミュニティFMの研究では、人口比での開局数が多かった北海道や沖縄を中心にローカルラジオ局への取材旅を繰り返した。またコミュニティFMのパーソナリティは、人生の経験を積んできた大人であることが多い。そうした含蓄のあるメディア表現者たちのライフストーリーも含めた語りに耳を傾けることができるようになったのは、自分も年齢を重ねたからだろう。社会科学は、研究者自身が年齢を重ねることで調査対象者との関係も変わってくる。その意味では、加齢も悪くはない。60代になってようやく、70代・80代の方々への取材のなかで深い話ができるようになったとも思う。

研究者としての最後の研究対象地となっている奄美も、日本のローカル文化の深淵のような場所である。なぜ、奄美だったのかについては、後述するが、奄美を研究しているというと、「いつから民俗学者になったの?」と言われる。最近、奄美に半分拠点を移して活躍している現代音楽の最先端の作曲家と出会ったが、その方も同様に、「民族音楽に移ったの」と怪訝がられるらしい。その作曲家も私も、民俗文化研究者になったのではない。どこまでも自分の研究の延長に奄美を位置付けて関わっている。

私の場合には、強固で独自の民俗文化が残る、つまり伝統文化の残滓が強固な奄美でさえも、現代のメディアの力が作動し、むしろそのメディアの力によって、地域の歴史・文化の再発見と自尊意識の醸成が深まっているからこそ奄美を研究しているのである。奄美では、〈自文化の自分化〉を通じて、音楽・食・クラフトなどさまざまな領域で人びとの表出活動が盛んだが、その契機にメディアの力が作動している。メディア研究者にとってまさに教科書のような島なのであり、「奄美から始めるメディア社会学」を掲げたのもそれゆえである。

その意味では、私は意図して、メディアの力の作動＝社会の情報化がはっきりと描ける地として奄美を選んでいる。島好きや、南国好きだからとい

うわけではない。日本のなかで、ローカルな社会圏でメディアが興味深い存在となっている地域は他にもある。北は帯広や函館。東海圏なら、浜松や高山がそれにあたるだろう。沖縄もしかりだ。しかし、一人で研究するには、人口140万人を抱える沖縄はひろくそして歴史も社会も複雑すぎる。こうして選ばれたのが奄美なのである。

※ ※ ※

様々なタイプの研究者がいる。私の親族の一人はやはり大学教員で、キリスト教伝来地の言語の研究に一生を捧げている。現在の私の調査地である奄美にも、生涯をかけて奄美島唄文化の研究を探求してきた巨人・小川学夫氏がいる。さまざまな研究者が奄美の島唄研究を試みてきたが、そうした研究の多くが、早い段階から鹿児島・奄美の地に移り住み、中央の学会から見えにくい位置にしながら、数々の名著を著してきた小川島唄学のベースがあってこそその研究であることに気づかされる。現在の私の研究も、小川島唄学のメディア学風な転用に過ぎないと自覚している。

最初に述べたように、そうした生涯一テーマの研究者に比べれば、私の研究はターンの連続である。ターンは、転進であり、脱皮であり、跳躍でもある。あるテーマに出会いながら、ある到達点に達すると、その先やその横に広がる地平が見たくなる。あるいは、なかなか腑に落ちない、自分がほんとうに「これだ」という説明フレームに出会わないなかで、「自分が探し求めていたものはこれだ」という衝撃の理論や調査対象との出会いが時々訪れる。私にとっては、隘路の突破なのだが、研究テーマからみれば、転換である。もちろん、前の研究とそれなりに繋がっているのも、横に転進していくイメージだ。新しい研究との出会いが、ターンとなり次の研究エネルギーを生んでいく。私の研究史は、そんな浮気者研究者の50年だった気がしている。

定年を間近に控えて、そんな「ターン」などという言い訳がましい視点から、ただ夢中で走ってきた自分のささやかで凡庸な研究史を振り返ったのが本稿である。こうした機会でもなければ、整理することのない転進だ

らけの研究史だ。

1 【学部時代：歴史理論への憧憬】

研究歴というには恥ずかしい年齢なのだが、田舎の生意気な若者が、初めて社会科学と出会った学生時代から自己物語を始めてみたい。新潟県北部の人口3万人ほどの田舎町の平凡な高校出身の私は、1971年に法政大学法学部政治学科に入学した。実家は個人商売の店であり、親族を見渡しても商才の家系のようで、商売は得意だが学問や芸術には縁がない一族である。高校3年で、それまでの理系志望から「政治経済」科目の授業の影響で社会科学に目覚め、最初のターンが始まった。当時は、1970年前後。田舎の高校にも少しだけ反戦運動の影響が及び、『三一新書』という左翼本に心震えた高校時代であった。

大学入学当初から、社会科学を深く学びたい、可能なら大学院にも進みたいという妄想があった私は、法政大学のキャンパスでの新歓の時に、長髪の賢そうな学生がブースを構えていた「法政大学政治思想研究会」というサークルに入部した。この時の賢そうな先輩は、その後大学院の研究室の先輩でもあり、共著『《情報》の社会学』を出すことになる小林修一氏である（故人、最後は東洋大学教授）。小林氏との出会いがなければ、私は研究者にはなれなかったと思うくらいの学兄である。サークルの同期3人の一人には、後にキリスト教バプティスト派研究の大家として明治学院大学の学長になる大西晴樹氏がいた。

法政大学の中では、例外的と言ってよいのかもしれないが、その研究会は大学院生を輩出するアカデミックな研究の場であった。研究チューターとして、若手の研究者も指導に来てくれていた。そして年に2度くらいのサークルコンパには、先輩達だけではなく顧問の政治学者松下圭一先生が顔を出す。宴席は大衆社会や国家統治・自治をめぐって松下節が炸裂する刺激に満ちた場であった。若くして大衆社会論争の主役となり、1971年には『都市政策を考える』という自治体政策の重要性を説いた名著を出し

たばかりの「松圭さん」の何と輝いて見えたことか。今振り返れば、松下先生は当時40代前半だったことに驚かされる。

若く生意気な学生だった私は、「先生、人間解放や共同体の問題はどうなるんですか？」と問い、「君の言っている共同体は、地縁共同体かね、それともわけのわからない共同体かね？」と一蹴されたことや、「政治理論というものは、誰にでも理解できる分かりやすいものでなければならない」、「学問は、多読と抽象能力だよ」、「(社会学を揶揄して) 調査だけやっても理論は生まれない」と語られたことを今だに覚えている。「人間解放」というマジックワードは、当時の左翼的な学生達にとっては、社会変革の至高のユートピア語彙であった。当時、藤田省三は、大学紛争を機に退職しており授業はなかったが、研究会ではしばしば丸山真男や藤田の名前が、そして市民社会という語が当たり前のように出てくる。今振り返れば、知的な界としては、丸山⇒松下という丸山学派の知的磁場のなかにいたように思う。

左翼的といえば、学生運動のピークが過ぎたとはいえ、当時の大学は、まして法政大学は授業も教員もそしてキャンパスの雰囲気も、とても左翼的なものであった。ロシア革命への思いを熱く論じる教授。まさしく講壇社会主義である。レーニン平和賞受賞の著名な教授。そして、火焰瓶禁止法が出来たのを機に、余った火焰瓶が飛び交うキャンパス。三里塚強制代執行の騒乱。私はアパートにいたのだが、後で聞いたら60人の語学クラスの3分の1の学生が三里塚に行っていた。大学の授業中に、ヘルメット姿の学生がやってきて、教員と何かごそごそ話をした後、10分間ほどのアジェンダ演説がなされるのが日常の光景であった。学生たちにとって、デモに参加するということが、それほど特異なことではなかった時代である。

そんな喧噪のなかで、比較的冷静に社会科学と向きあえたのは、サークル論という各団体に課せられた社会運動議論を棚上げして、アカデミックであり続けようとした研究会の姿勢のおかげである。

学部時代の関心を一言で言えば、「概念で歴史を理論的に把握する」ことの魅力である。Gemeinschaft、Gessellschaft、Genossenschaft、Gemeinwesen など独語のなんと新鮮で魅力的に見えたことか。「概念で社会を構造化して切り取る」という指向は、退職を迎える今日まで50年間一貫して続いているように思える。自治体の政策立案現場や、ネットユーザー、コミュニティFM、奄美の文化へと、どんなにフィールドワークを重ねても、私にとってそれはエスノグラフィーを書くためではなく、抽象的な概念図式を構築するための準備作業である。そうした概念構築、セオリー構築への希求は、学部・大学院で培った思考のトレーニングという基層からきていることに今さらながらに驚かされる。

さて、法政大学政治思想研究会での最初の洗礼は、これも当時の社会科学系の学生の必読書であった、『ドイツ・イデオロギー』(Karl Marx)と『プロテスタティズムの倫理と資本主義の精神』(Max Weber)であった。研究会では、毎年『政治思想』という雑誌を刊行していたので、輪読会の学習とは別に2年次からは自分のテーマで個人の研究を進める必要がある。自分の関心に基づく読書は、大塚久雄の『共同体の基礎理論』から始まり、さらに福富雅実『共同体論争と所有の論理』へと続いた。2年次の研究論文は、「福富雅実『共同体論争と所有の原理』ノート』で人生最初の活字論考である。

当時、マルクス主義右派である構造改革派(構改と言った)の理論雑誌である『現代の理論』は、Marxのテキスト再解釈を進めており、市民社会という概念をマルクスの歴史理論に導入し始めていた。松下門下の研究会で「市民」という概念と向かいあっていた私はMarxコメンタール論文を読みあさり、新しい社会主義=共同性の再建の美しい用語に魅了されていた。当時話題となっていた平田清明『市民社会と資本主義』(1969)から始まり、望月清司『マルクス歴史理論の研究』(1973)へと進み、3年次にまとめた論文は望月の書籍をもとにした「マルクス歴史理論における分業の論理」である。

政治学科にしながら、法律学や政治学に全く関心がなく、もぐりで出席している授業は法制史や経済史関係ばかり。当時法政大学には、大塚久雄門下の田中豊治先生がおられそのゼミにも出させていただいていた。そして、3年次には経済学部の学術団体である経済史研究会にも入部し、後に帝京大学の教壇に立つ手塚眞氏らと親交を重ねた。丸山シュレー（当時の学生らは、生意気にそうした語を使っていた）から大塚シュレーへと関心の転進である。

歴史を概念や理論で捉えて整理するということへの関心は、当然のように Max Weber に向う。『プロ倫』よりも、私を捉えたのはその経済史理論である。大学4年の時には『一般社会経済史要論』や『経済と社会』（『〇〇の社会学』などのシリーズで翻訳が進んでいた）に惹きつけられていった。その年の論考は、「ウェーバー『経済史』における分業の論理」であった。

1972／「『共同体論争と所有の原理』ノート」、『政治思想』第7号、法政大学政治思想研究会、pp44-56

1973／「マルクス歴史理論における分業の論理」、『政治思想』第8号、法政大学政治思想研究会

1974／「ウェーバー『経済史』における分業の論理」、『政治思想』第9号、法政大学政治思想研究会、pp11-28

1975／「《社会的世界の意味・妥当》に関するノート—フッサール『危機書』からの示唆—」、『政治思想』第10号、法政大学政治思想研究会、pp18-24

2【大学院時代：社会学との出会い】

大学院への進学をめぐる悶々としている時に出会った本が、稲上毅先生（法政大学⇒東京大学）の『現代社会学と歴史意識』（1973）である。この本との出会いが、社会学へのターンとなったので、人生でもっとも重要な一冊である。奇跡的なことに、その頃若き稲上先生が法政大学に専任

教員として着任しておられていた。授業に出席し、大学院受験のために留年していた大学5年の時には、ゼミにも出させていただいた。まだ自分の関心を十分に言語化できないまま、社会を説明する図式を漠然と求めている生意気な学生に、「君の関心は何なんだね」と問いながらも、稲上先生がよくそんな学生に付き合ってくれたものだと思う。タルコット・パーソンズやアルフレッド・シュッツとの出会いも、稲上先生を介してである。ウェーバーからパーソンズへ。当時、稲上先生らが、パーソンズの『社会的行為の構造』の翻訳を刊行し始めていた時期である。大学院受験生としての大学5年目は、わけもわからず難解なパーソンズの英文と向かい合っていた一年間であった。

当時は、パーソンズの機能主義批判も盛んで、意味社会学としてシュッツが紹介され始めていた。その源流は、フッサール現象学である。大学5年の夏に、哲学的素養皆無のままフッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』という大著と格闘したことを覚えている。大学5年の時の論考は、「《社会的世界の意味-妥当》に関するノート」である。

さほど優秀でもなかった私だが、幸い3度目の受験でようやく法政大学社会科学部社会学専攻に滑り込むことができた。研究テーマは、稲上先生の請け売りで「機能と意味」の統合の理論の模索である。パーソンズの機能主義批判を前提に、初期パーソンズのもっていた意味論的な要素を掘り起こす。つまり主意主義 (Voluntarism) に注目する。この関心は、稲上先生の影響であると同時に、主体性論的志向の強い当時の (今もそうだが) 日本の社会科学の一般的な傾向でもあった。

大学院入学後は、稲上先生がまだ授業を担当していなかったこともあり、小林修一学兄の引きで北川隆吉先生の門下に入れてもらうことになった。北川先生は、左派の論客であり学会への影響力も強い先生ではあったが、多様な立場の研究を受け入れてくれる度量のひろい指導者でもあった。また、自分の研究テーマに関係なく、研究室として実施される地域調査には全員が駆り出された。地域調査では、研究室の先輩に尻をたたかれ、

「ちゃんと証拠資料を集めてこなきゃだめだよ」と一からフィールド調査の手ほどきをしていただいた。この地を這うような調査の経験は、その後、自分がフィールド調査をしていく際の非常に重要な財産となっていたことに気づいたのは、大学教員になってかなり年齢を重ねてからである。

当時の法政大学の教員には、中野収先生、佐藤毅先生、矢沢修次郎先生ら、著名な社会学者が名を連ねていた。いま思えば、とても恵まれた教育環境であった。修士論文は、「初期パーソンズにおける主意主義的行為理論の構造」である。だが、なかなか博士後期課程への試験に合格しない（当時の法政大学の院では、修士から博士後期課程に進む段階で、かなり人数が絞られたので何年か浪人するのが常態化していた。）

そうした中で、また一つのターンがあった。それは、パーソンズとホワイトヘッド哲学の関係を論じた研究との出会いである。システム論の原型を、意味論にはなく、有機体論に探る研究であった。修士論文での主体性論的アプローチから、一気にシステム論的アプローチへの転換。世界を説明する図式としては、その方が説得力があると思ったということだ。ホワイトヘッドとパーソンズの関係、パーソンズの中にあるホワイトヘッド的有機体論の要素を発見する。それが、「分析的リアリズム」という科学方法論とその背後仮説としての有機体的思想の探究となった。修士論文とは別に、2年後に博士後期課程への受験論文「T・パーソンズと形而上学的秩序 - 秩序の方法論的問題 -」を書いたのだが、受験面接で矢沢修次郎先生に、主体性論からシステム論へのターンを鋭く指摘された。

こうして修士課程で4年間を過ごし、ようやく博士後期課程に進めたことになる。ストレートで修士・博士後期課程を過ごして、修了時には博士論文を提出するという現在とは、大きく異なった時間の過ごし方である。当時の大学院では研究時間を贅沢にとる、ゆったりした時間が流れていた。そのせいか、結局博士後期課程では、このテーマで学会発表や論文執筆を続けた。大学院の博士課程には5年間在籍したが、その間、理論研究としてまとめたものは、『法政大学大学院紀要』に書いた「ホワイトヘッド・

イン・パーソンズ」と「パーソンズ:その方法のロジック」の2本である。学会発表も、同様のテーマであったが、正直、理論社会学の研究として大きな成果があったとは言えない。概念 concept とは何か、概念化 conceptualization, conceptual formation とは何か、理論構築 theory building とは何か、それは実在とどのような関係にあるのか。そんな方法論的で形而上学的な問いを、延々と不毛に考え続けていた院生時代である。

1980 / 「ホワイトヘッド・イン・パーソンズーパーソンズにおける秩序の方法論的問題ー」、『法政大学大学院紀要』第5号、pp.217-232

1980 / 「住民運動論を考える」、『社会研究』第11号、法政大学大学院社会学専攻委員会、pp.59-75

1981 / 「情報公開：その市民的理念と行政の課題」、『都政』、東京都政調査会、pp.35-49

1982 / 「パーソンズ：その方法のロジックーシステム思考の源流ー」、『法政大学大学院紀要』第9号、pp.237-249

3 【転機①：社会の情報化の研究】

※情報社会を、情報制度・自治体情報政策などから研究

〈社会運動への参加〉

学問の転機というのは、研究テーマから内発的に引き起こされるのが理想なのだろうが、私の場合、最初の根本的な転機は、社会との関わりと就職との関係のなかで始まった。アメリカ社会学理論の研究をやりながら、個人的な政治関心から、修士課程の3年目・4年目に、東京で市民運動・消費者運動に関わったことが、文字通り人生の転機となってしまった。

もともと構造改革理論や市民主義に関心のあった私は、江田三郎が社会党を離党して立ち上げた「社会市民連合」に参加していくことになる。そこには、敬愛する経済学者正村公宏も理論的指導者として加わっていた。そうしたなかで、政党よりも、市民運動への関心が強くなり、結局「情報

公開法を求める市民運動」に関わることになった。それは、自由人権協会、日本消費社連盟、市民クラブなどの団体が集まってつくった「市民運動」という名前の市民運動である。市民クラブは、国会議員になる前の菅直人からも関わっていた市民活動団体で、「シビルミニマム」という第3種郵便物を発刊していた。実質的に深くかかわったのは、博士課程に入学する前後の2年間くらいであった。

思い出すのは、その活動のなかで、講演依頼もあって、同じ練馬区石神井公園という街に住んでいた著名な哲学者の久野収先生の自宅を訪ね、一緒に喫茶店に出向き、何時間も学問の仕方・生き方について語っていただいたことである。途中、すでに結婚していたワイフも同席して過ごした数時間は、人生で忘れられない貴重なひとときとなった。今、覚えているのは、「歴史と国家の政策は研究するな。それは資料的に東大の研究者には勝てない。コメの値段がいくらするのか、そういった生活感覚・世俗意識が大事。社会・運動との接点を持ち続けなさい。」といった内容であった。左翼系の偉大な哲学者の、思いもよらない世俗的な感覚に満ちた話の何と刺激的であったことか。

さて、理論研究のもどかしさを晴らすように関わった社会運動との関わりが、ひょんなことから研究テーマを変え、そして研究者としての人生を拓いてしまったのは、「運」としかいいようがない。

ある日、大学院の指導教官である北川先生に、「実は、情報公開の市民運動に関わっていて……」と、ほそっとカミングアウトをしたのだが、「そうか、そうしたことに興味があるのか」ということになり、先生が設立に関わっておられた東京自治問題研究所を紹介され、そこでの自治体の情報公開条例研究のプロジェクトに加えて頂くことになった。

こうして、東京自治問題研究所や研究所が主催する研究会を通じて、東京23区の情報公開条例への取り組み、情報提供施策の取り組みなどの比較作業に取り組むことになった。東京大学社会科学研究所の井出嘉憲先生を中心とした数人の研究者集団に加えていただいて、報告書づくりが始

まった。またこれを機会に、情報公開やプライバシー保護をめぐる自治体情報政策の論考を幾つも書く機会を得ることになった。ただ、政策の現状を描くことはできるが、法律学と違う独自の社会論や情報化社会論を展開できるかといえば、なかなか難しい。「社会が情報化するとはどういうことなのか?」、社会の中の情報の流れそのもののあり方への関心との間で、なかなか自分独自の研究テーマや解釈枠組を見つけあぐねていた時期であったように思う。

〈中京大学との縁〉

そして、これは本当に「運」・「僥倖」・「縁」としか言いようがないが、情報社会に関心があるということが、当時名古屋大学に移籍していた北川先生が設立の為の人事に関与していた中京大学社会学部のポストに繋がってしまった。設置準備にも深く関わっていたある先生が、新しい学部で情報社会やコンピュータと社会の関係について研究・教育する担当者を求めているのである。当時、情報社会の研究者はほとんど皆無であったし、それが学問対象や教育のカリキュラムではなかった時代である。その先生とのやりとりを通じて採用を決めていただいた。当時、私立大学の大学院生からいきなり専門学部の教員に職を得るということは希であった。そして、実績も少ない大学院生を将来性だけで採用してくれた中京大学には感謝しかない。業績を積むに従って、途中、いろいろな大学からの誘いもあったが、生涯、迷いなく一つの大学に奉職できたのは、そうした実績不十分な院生を「拾ってくれた」大学への感謝の思いからである。

しかも準備のために1年間早く着任できるという。その条件は、担当科目との関わりから、コンピュータ・プログラムの教育を担当できるようになって欲しいということだった。そこで、1年間新宿にあるコンピュータ専門学校の夜間コースに通うこととなった。当時は、まだプログラムの一部が紙カードで動いた時代。30歳を過ぎて、マシン語やベーシック、コボルなどのプログラミング言語やアルゴリズムと格闘することとなった。

また自分でもフロッピーディスクで動くパソコンを購入、一気に情報社会研究者らしい世界に入り込んでしまった。とりあえず、専門学校は首席で卒業した。

こうした経緯もあり、社会学部やその後の現代社会学部でも、コンピュータ教育やメディア科目の担当者という周縁的な位置付けで、社会学関連科目の中核を担うことはなかった。学部創設から30年ほど経った2015年からの4専攻時代になってようやく、社会学の専攻に入れてもらい、社会学と名の付く科目を担当できるようになった。〇〇社会学という著書を何冊か出版してきた研究者としては嬉しい限りだ。

ただ、私だけではなく、情報社会・マスコミ・メディア領域の研究をしている教員の多くが、それぞれの職場で社会学教育のメインストリームの周縁で、どちらかといえば客寄せ的な位置付けに置かれていることが多い。その後、多くの私立大学の社会学部では、メディア社会学科やメディア文化専攻などが設置されて、中京以外の状況は大きく変わってきている。

〈コンピュータ社会・情報政策研究〉

さて、東京自治問題研究所との付き合いは、その後も続き、東京23区の先進自治体政策研究と関わることになった。自治体政策、つまり自治体職員に取材するだけの研究だが、「現場」の職員たちとの対話が、理論偏重の若い未熟な研究者に、地域や自治体政策への強い関心を引き起こしたのは事実である。「自治体情報政策」は、アメリカ社会学の理論研究からの第一の、そして最大の転機・転換（ターン）となった。

この時期は、東京自治問題研究所や名古屋大学の地域研究への参加もあり、東京23区の政策、さらに岐阜県可児市・土岐市などの生涯学習政策などの調査にも深く関わることになった。情報社会研究と無縁のようではあるが、地域をはいずりまわり、色々な人に取材し、地域のリアリティに触れながら地域コミュニケーションのあり方を考える。それはある意味、贅沢な研究時間の過ごし方である。「フィールドに出る楽しさ」、そうした

貴重な経験を得ることができたのは北川先生との交流のおかげであった。研究者として自立し、パソコン通信、コミュニティFM、奄美という調査フィールドを踏破していると、「フィールドに出る楽しさ」が身に染みついた自分に出会う。

この時期、北川先生の指導で、コンピュータ革命研究会に参加させていただいた。私自身は新聞製作のコンピュータ化を分担担当した。1985年の「新聞製作とコンピュータ」は、出版本に掲載された最初の論考である。1986年には、「情報・通信機能と東京の中核管理機能」(研究双書2『中核管理機能都市 東京』)を書く。これは自治問題研究所の双書に書いた論考である。知的情報資源の8割が東京に集中する日本の情報流の偏差を描いた論考である。この論考はその後、何人かの東京論に引用された。

中京大学に就職した1985年以降に書いた論考は、多くが情報公開や、地域情報化(情報産業開発政策)などの論考である。また、私を中京大学に採用してくれた恩人である日比野省三先生と一緒に、情報社会、とりわけ情報ネットワークシステムが社会を変えていくという視点から「社会情報」という概念を提起し、それを一冊にまとめることができた。社会に役立つ情報システムとは何かという問いや、地域の情報産業開発などへの関心から、テクノポリスなど各地の先進地域開発のプロジェクトを訪問した。

日比野先生にはもうひとつ感謝しなければならないことがある。それは、本のつくり方だ。なかなか出版原稿が書けない私に、「本をたくさん読めば書けるというものではない。書くために読むんだ」と指摘された。出版書を書くということのコツのようなもので、その後、まがりなりにも著作を何冊か出せたのは、この時の共著出版の経験が大きい。

『社会情報学のデザイン』(1988)は、私が大まかな原稿を書き、日比野先生がある程度の体裁を整える形で生まれた著作である。「社会情報」という概念はその後、社会情報学や社会情報学会、社会情報学部などの使われ方をして定着していったので、極めて先駆的な、ある意味早すぎた問題提起であったのかもしれない。私としては、初めて自分の名前が背表紙に

ついた本の出版となった。

ただ、このころまでの研究は、自治体を主体に据えて、「地域」や「政策」という次元だけで、情報化現象や情報社会を捉えていた。先進的な自治体政策の現場を追い求めて、その事例から情報社会を考えていたに過ぎない。単純化すれば、「上からの情報化」・「外からの情報化」という次元に止まっていた。

〈パソコン通信の衝撃〉

そして、「上からの情報化」・「外からの情報化」に止まっていた私の情報社会イメージを大きく変える転機が訪れてきた。それはパソコン通信との出会いである。当時、アメリカでも BBS（電子掲示板システム）開局の胎動があり、日本でも会津泉氏らが中心となって「ネットワーキング・デザイン研究所」が立ち上がり、中央省庁を動かしながら、地域でパソコン通信のホスト局を使って、ユーザー自身がつくりあげるコミュニケーション型の情報社会が提起されていた。大分、富山、仙台などで、「ネットワーキングフォーラム」という大規模なシンポジウムが次々に開催され、パソコン通信ユーザーと行政の情報政策担当者が集まって、これからは、「データベース型の情報社会ではなく、コミュニケーション型の情報社会だ」ということが喧伝されていた。

1985年から1990年くらいにかけてのパソコン通信の盛り上がりは、当時創刊された雑誌『パソコン通信』や『ネットワーカー』などで仰々しく描かれている。私自身も、富山大会からそうしたシンポジウムに参加し、ネットワーキングデザイン研究所のメンバーや、当時日本のパソコン通信界をリードしていた方々（今ならさしずめインフルエンサー）と交流し、時にはシンポジウムのパネリストとして、「私たち市民自身が表現する装置を手に入れた」とパソコン通信への大きな期待を語っていた。

また、また自らも大学でパソコン通信ホスト局を立ち上げたり、豊田市のパソコン通信事業に関わったりと、メディア事業の実践も展開するよう

になっていた。「地域」や「政策」への関心はそのままに、その中でもユーザー自身が切り拓く「下からの情報化」・「ユーザーの内発的な情報化」の必要性を語るような論文を書き続けていた。

日本のパソコン通信は、電気通信事業に関わる法改正が行われ、NTTが誕生し、高度情報化が叫ばれた1985年から始まったのだが、その時期を代表するメディアであった。当時、電子紙芝居と揶揄されたビデオテキスト（日本では、キャプテンシステム）が事業として順調に展開できないなかで、パソコン通信に期待が集まっていたのである。そして、草の根BBSが、やがて大手の商用パソコン通信サービスに集約されひとつの成熟期を迎える。やがて、インターネットが1995年から始まる。私自身は、1990年少し前に、すでにパソコン通信への期待熱が冷めて、ケーブルテレビなど他の地域メディアに関心が移っていたが、情報社会についての論考は次々に書き続けていた。

〈メディア・デザイン論の展開〉

私の情報社会をめぐる言説は、1990年代に入り、メディアという視点を強く意識し、政策論や地域開発論の視点ではなく、純粹にメディア媒介コミュニケーションのメディア特性、メディアの文法、そうした視点から、情報社会を捉えるようになっていった。この頃から私の周辺の研究者の間ではメディア文化・メディア社会という言い方がされ出している。1991年に書いた「パソコン通信のメディア特性」は、その意味では一つの到達点である。ただ、この時の私のネット社会解釈は、仕事・道具・政策のフレームではなく、「遊び」や「自足的（コンサマトリー）」というフレームでメディアを捉えることを強調していたに過ぎない。そのため、書いた論考は、ポストモダン的な立ち位置の代表的な言説として引用されることもあった。その当時も、そして今日でも、ネット空間は公共圏論や世論形成・社会運動などの文脈で研究されることが多いので、私のような独我論的で極私的なネット論は、その対極的な位置にあると評価されてもいたしかた

ない。

そうしたなかで、教科書としての必要もあり、学部、大学院の先輩でもある小林修一氏との共著『《情報》の社会学』（1994）をまとめた。3章の「社会と情報 情報化社会の表層」と4章「社会と情報 情報化社会の深層」を担当した。インターネット（1995～）前夜の時期ではあるが、この当時、こうした情報社会についての社会学の教科書がなかったことあり、以降10年間くらいの間に4万部ほど発行された異色の教科書である。

また、東京自治問題研究所の研究プロジェクトで、世田谷区職員労働組合の『区政白書』づくりに数年間関与し、それをより一般化して「情報的現実としての地域」（1997）にまとめた。この論文は、メディアという視点から地域にアプローチした論考として、他の研究者に引用されることがたびたびあった。

所属学会についても、少し触れておきたい。私にとってのメインの学会は、日本社会学会ではなく、日本マス・コミュニケーション学会であるが、その学会に入会したのも、パソコン通信研究の頃からである。つまり、大学の教員になって数年してからである。当時は、新聞学会という名称であった。ちなみに、この学会は、2022年の1月1日からメディア学会へと再度名称を変更しているように、時代の流れを強く反映した学会である。また、中京大学で1998年と2008年に大会を開催したこともあり、理事などいくつかの役職も経験させていただいた。

さらに、2000年代に入り社会情報学会が創設され、その学会も比較的関わりのある学会となった。ただ、関西大学を拠点に開催されていた関西のマスコミ・メディア研究者の交流サロンであった「マスコミフォーラム」が、ある意味で最も実質的な研究交流の場であった。今日に至るまで名古屋圏には、メディア社会学や文化社会学の研究者が殆どいないのだが、私が研究活動を継続できたのも、このサロンでの交流があったからである。時には、井上俊先生も起こしになり、若い院生たち同士の交流も盛んであった。当時若く血気盛んであった院生たちの多くも、今では各大学や学会の

中堅の研究者として活躍している。

1984 / 「社会情報流と制度設計のロジック - 情報公開制度と請求権論を事例として -」、『法政大学大学院紀要』第13号、pp.307-321

1985 / 「足立区における個人情報保護に関する問題点」、『コンピュータ高度利用と住民・自治体労働者・自治体行政』東京自治問題研究所、pp.27-31

1985 / 「コンピュータ現状の研究 2 新聞製作とコンピュータ」、北川隆吉・尾関周二編『コンピュータ革命と現代社会 1 社会・文化』大月書店、pp.207-224

1985 / 「情報公開の制度化・運用・課題」、『中京大学教養論業』第26巻第2号、pp.97-144

1986 / 「情報・通信機能と東京の中核管理機能」、研究双書2『中枢管理機能都市 東京』東京自治問題研究所、pp.52-71

1986 / 「新聞製作とコンピュータ」、情報問題研究集団編『コンピュータ革命と現代社会 1 社会・文化』大月書店、pp.207-224

1987 / 「社会情報学に関する一考察」(日比野省三氏との共著)、『中京大学社会学部紀要』第1巻第2号、pp.1-56

1987 / 「地方中堅自治体における都市形成と社会計画」、『中京大学社会学部紀要』第1巻第2号、pp.57-97

1988 / 「自治体情報政策と情報制度」、『中京大学社会学部紀要』第2巻第1号、pp.1-47

1988 / 「情報公開とプライバシー保護」、『自治体情報政策の展開 <上>』自治体研究社、pp.143-172

1988 / 『社会情報学のデザイン』日比野省三氏との共著、福村出版

1989 / 「メディア・デザインの視点」飯田哲也・安江孝編著『伝統と新しい波』時潮社、pp.27-48

1989 / 「今のニューメディアをどう見るか(上)」、『月刊 東京』11月号、東京自治問題研究所、pp.8-18

- 1989／「今のニューメディアをどう見るか（下）」『月刊 東京』12月号、東京自治問題研究所、pp.15-23
- 1989／「板橋のニューメディア構想を考える」、『板橋区 OA・情報化問題中間報告』東京自治問題研究所、pp.21-41
- 1989／「地域情報化のデザイン…その(1)」『中京大学社会学部紀要』第4巻第1号、pp.31-51
- 1990／「地域情報化のデザイン……その(2)」『中京大学社会学部紀要』第5巻第1号、pp.133-
- 1991／「地域情報化政策に問われていること」『月刊 東京』6月号、東京自治問題研究所
- 1991／「パソコン通信のメディア特性」、『中京大学社会学部紀要』第6巻第1号、pp.101-180
- 1993／「パソコン通信をめぐる検証課題」『中京大学社会学部紀要』第7巻第2号、pp.15-42
- 1994／「コミュニティ・教育・文化行政の現状と課題」、『地域・住民・行政の民主的連関をもとめて—世田谷区政白書中間報告』東京自治問題研究所、pp.41-62
- 1995／「コミュニティ・教育・文化・環境行政の現状と課題」、『地域・住民・行政の民主的連関をもとめて—世田谷区政白書』、pp.243-304
- 1994／『《情報》の社会学』小林修一氏との共著、3章社会と情報Ⅰ、4章社会と情報Ⅱを担当、pp.97-213
- 1996／「情報とコンピュータ」、北川隆吉監修『社会学 下』文化書房博文社、pp.1-37
- 1996／「情報リテラシーと情報リテラシー」『財団法人情報処理研修助成財団機関誌』84
- 1997／「情動的現実としての地域」、『社会と情報』第2号、東信堂、pp.92-110
- 1997／「メディア文化と情報接触」、橋本和孝・大沢善信編著『現代文化

社会論』東信堂、pp.45-63

4【転機②：個人の情報化の研究】

※自己物語論とメディア論の接合を研究

シュッツ研究者として知られ、自己論研究の大家である片桐雅隆氏が中京大学に着任し交流したことが、今の私の理論的立ち位置を形づくる転機となった。自己論・自己物語論との出会いにより、ようやく自分が納得できる、メディア媒介コミュニケーションをめぐる解釈図式を獲得することができたのである。情報政策論やメディア論一般から、以後、自己論とメディア論の結婚させたことが私の基本的な立ち位置となった。独我論・流出論という批判を浴びつつも、「言い切った」ことに対する一定の支持者もいる、自己論とメディア論の結婚こそが、その後の「加藤メディア社会学」の基軸である。それがどれだけ未熟であり、また偏差に富み、畸形のものであっても、20年前に決めたこの自分の立ち位置で押し通してきた。だから、私のメディア社会学は、取り扱う現象に少し新しい情報サービス事業が加わるだけで、基本20年間同じ内容である。

論考で振り返ると、ネット空間でのメディア媒介コミュニケーションをどのようなフレームで総合的に理解するのがよいのか、数年間の模索のなかでたどりついたのが「CMC空間と自己物語」（1997）の論考である。これは、その後20年間の自分のインターネット社会論の視点が定まった論考である。その後の論考は、その再考や精緻化として続いているにすぎない。

自己物語論は20世紀の終わり頃から盛んになるが、私の自己物語のアイデアも、他者の引用というよりは、自分の研究のなかから自然と浮かび上がった語彙である。それでも、片桐氏との交流がなければ、自己論をメディア論に適用するという発想は生まれなかっただろう。CMCの論考を書いた翌年の2000年に、片桐氏は、『自己と語りの社会学』を出版、浅野智彦氏も『自己への物語論的接近』を2001年に出している。こうした流

れをみると、自己物語論が流布する2000年前後の思想的土壌の中に私もいて、自然とその影響を受けていたことは間違いのないのだろうと思う。

単著を次々に出版され、生涯10冊の単著出版が目標と語っておられた片桐氏には、さらに、普通の学生にも分かるような平易な言葉で授業をすることと、分かりやすい文体で書くことの重要性を教えていただいた。また、一つの著作の執筆を進めている時に、すでに次の構想・研究の準備をしているという、氏の研究と出版のサイクルのつくり方も示唆的であった。

他方で、そのころ文字コミュニケーションだけではなく、スクリーンと向かいあうというメディア経験を理解するため、ビデオゲームの研究を数年間おこなった。ヴィジュアルティ論や空間論など、メディア文化・メディア社会への理解を模索していた時期である。ただ、研究成果としては、「視覚メディア経験としてのビデオゲーム」（2000）だけに止まってしまった。

また、この時期阪本俊生氏らからの影響を受けながら、自己論の視点から、メディア時代のプライバシー問題についても固めて研究した。社会情報学会の学会誌掲載論文となった「電子ネットワーク時代のプライバシー」（2003）や「情報と制度のドラマトゥルギー」（2003）などである。

そして、メディア媒介コミュニケーションの舞台が携帯電話に代わってきたこともあり、携帯電話の研究なども始め、そうした視点を取り入れてまとめたのが、初めての単著『メディア文化の社会学』（2001）である。この単著を出した際に、もうひとつのメディア研究の領域が残されていた。それがスクリーンとのコミュニケーションをめぐる研究だと宣言したのだが、結局、その研究は果たせないまま終わってしまった。かろうじて、その後の『自己メディアの社会学』（2012）の第2章「メディア・自己・近代 ～自己メディアの源流との転換～」で視覚メディア論を取り扱うに止まってしまった。

さらに、2005年に、職場・自宅の近くで万博が開催されたことから、環境問題や地域開発問題ではなく、自己論の視点から、万博を楽しんだ人びとに焦点を当てて、小川明子氏、岡田朋之氏らと万博本『私の愛した地

球博』の出版を企画した。愛知万博で人気が出たエクアドルのフォルクローレ系音楽ユニットを呼んで瀬戸市で出版記念の400人規模のコンサートまで開いた本なのだが、販売は芳しくなかった。

次項の転機③の時期と重なるのだが、メディア論と自己論を連環させるという関心はその後も続き、より理論的な考察を手厚くした『自己メディアの社会学』(2012)、その改題・改訂版である『メディアと自己語りの社会学』(2022)まで続く。『メディア文化の社会学』(2001)で書き切れなかった、自己論を理論的に深めたメディア論を書くという課題を、ラジオ研究や奄美研究と並行して続けてきたということである。『自己メディアの社会学』は、教科書として使用してきたのだが、出版社が業務を終了することとなり、実質的に絶版となった。もう少し授業で使用する必要があることもあり、電子出版を試みた。タイトルも、内容に即して『メディアと自己語りの社会学』と代え、また数多くあった誤植や言い回しの不自然さを改訂した。中間業者を介した Kindle からの出版で、私にとって初の電子出版の試みとなった。

それにしても、数年単位で出版するはずの企画が、いつも10年単位となくなってしまっている。学事・教育に追われるせいもあるが、一気呵成に出版し続けるパワーと知力がなかったということだろう。企画しながら出版できなかつた何冊の単著企画が心残りである。

1999 / 「CMC と自己物語」、『中京大学社会学部紀要』第14巻第1号、pp.85-112

2000 / 「若者コミュニケーションの行方」、交流編集委員会『交流』中部電力株式会社、No.51

2000 / 「深夜のネット徘徊に潜む欲望を読む」、『月刊少年育成』、537号、pp.8-14

2000 / 「視覚メディア経験としてのビデオゲーム」『中京大学社会学部紀要』第14巻第2号、pp.79-123

- 2000／「メディア空間と社会情報学の主題」『中京大学社会学部紀要』第15巻第1号、pp.29-58
- 2001／『メディア文化の社会学』福村出版、pp.1-204
- 2001／「青少年と電子メール文化」、『月刊少年育成』、545号、pp.20-26
- 2001／「二つの世界を往還的に生きる」、『情報とネットワーク社会』、96、情報処理教育研修助成財団機関誌、pp.5-7
- 2003／「電子ネットワーク時代のプライバシー」『社会情報学研究』No.7、日本社会情報学会、pp.43-55
- 2003／「情報と制度のドラマツルギー」『講座社会変動8 情報化と文化変容』ミネルヴァ書房、pp.138-164
- 2003／「ネットワークの中の対話」、交流編集委員会『交流』中部電力株式会社、No.60、pp.9-12
- 2003／「電話風俗とテリトリー」『現代風俗研究2003 テリトリー・マシーン』、pp.102-116
- 2003／「視聴覚教育からメディア・リテラシー教育へ」、『視聴覚教育研究』、最終号、中京大学視聴覚教育センター、pp.5-17
- 2005／*Japanese Youth and the Imaging of Keitai, Personal, Portable, Pedestrian*, edited by Mizuko Ito, Daisuke Okabe and Misa Matsuda, The MIT Press, 2005、pp.103-119
- 2005／「万博マジックと11の物語」、「万博現象をどう受けとめるか」、『私の愛した地球博』加藤晴明・小川明子・岡田朋之、リベルタ出版、pp.11-31、pp.243-521
- 2005／「表現したがる若者たち」、『月刊少年育成』、No.597、pp.22-27
- 2006／「日本の若者におけるケータイをめぐる想像力」、松田美佐・岡部大介・伊藤端子編『ケータイのある風景』、北大路書房、pp.71-86
- 2006／「IT 浸透 変わる心理」、北海道新聞、2006.3.15
- 2007／「現代の組織と情報・メディア」、津村修編著『組織と情報の社会学』、文化書房博文社、pp.39-61

- 2007 / 「私のささやかなFD - メディア教育実践の現場から -」、『愛知大学文学部FD通信 2007』、pp.5-77
- 2008 / 「人はなぜメディアの彼方に愛を夢みるのか」、『月刊少年育成』、No.626、pp.8-13
- 2008 / 「「ここ」と「よそ」心が行き来」、朝日新聞コラム
- 2009 / 「疑似イベント DJ ブーアスティン『幻影の時代』」、井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシック6 メディア・情報・消費社会』世界思想社、pp.179-185
- 2010 / 「電話文化の変容」井上俊・長谷川正人編著『文化社会学入門』ミネルヴァ書房、pp.46-47
- 2011 / 「情報力革命と自己メディア」、『中京大学現代社会学部紀要』第4巻第2号、pp.103-127
- 2011 / 「メディア・近代・自己 ~自己メディアの源流とその転換」『中京大学現代社会学部紀要』第4巻第2号、pp.129-158
- 2012 / 「ケータイという自己メディア」、『中京大学現代社会学部紀要』第5巻第2号、pp.31-81
- 2012 / 『自己メディアの社会学』リベルタ出版、pp.1-257
- 2013 / 「初期情報社会論の言説空間~1970年代から80年第の社会的想像力を読み直す~」『中京大学現代社会学部紀要』第6巻第2号、pp.87-147
- 2015 / 「書評 『ネットワーク・ミュージッキング』」、社会学評論、Vol.61, No.2、pp.227-229
- 2022 / 『メディアと自己語りの社会学 (『自己メディアの社会学』改題・改訂版)』Kindle、pp.1-283
- 2021 / 「書評 『ネットカフェの社会学』、『ソシオロジ』、No.200、pp.122-

5【転機③：放送人（準公人）の情報化の研究】

※コミュニティFMとパーソナリティを研究

たまたま、2001年に博士後期課程に有線放送電話やコミュニティFM

を研究テーマとする院生（現、立命館大学産業社会学部教授）が入学し、博士論文の指導をすることになった。彼とも、関西のマスコミ・メディア研究者のサロンであるマスコミ・フォーラムの縁である。3年間にわたり大学院教育高度化の補助金が出たこともあり、私が引率するかたちで全国の施設を調査取材することになった。そうした契機から、私自身は、コミュニティ FM 業界そのものについては関心がなかったが、そこでメディア表現する市民パーソナリティに興味をもち、自らも調査するようになった。

インターネットでの自己表現のようにまったくの自由でもなく、国の認可を得た放送局の中の語りの空間、つまりある制度的な放送空間。その空間の中での括弧付きの自己語り。プロのパーソナリティとは違う、市井のパーソナリティ感覚が興味深かったのである。当時コミュニティ FM について関心のある研究者は少なく、いつのまにか、地域メディア、ローカルメディア、コミュニティ FM の研究者という一面も身につけるようになり、そうしたテーマでの執筆依頼仕事もするようになった。

未だにラジオについては一冊の本としてまとめてはいないのだが、結果としてラジオ研究がマスコミ研究者としての自分のラベルとなった。コミュニティ FM 研究の面白さは、全国各地をまわりながら、大人で魅力的なコミュニティ・パーソナリティのライフストーリーと出会えることだった。とりわけ、コミュニティ FM の先進地の北海道を全局まわり、さらに人口比でコミュニティ FM 局数が最も多い沖縄県を集中して調査してきた。稚内、名寄、根室、釧路、帯広、富良野、北広島、札幌、室蘭、ニセコ、函館、そして、那覇、豊見城、読谷、名護、石垣島、宮古島、久米島と 60 局あまりに及ぶ。

教育活動としてのメディア実践については後述するが、ラジオとの出会いは、ラジオを取り入れた教育実践という副産物を生むことになった。コミュニティ FM の現場を回りながら、「これは教育で使える」と直感したからである。まず、ゼミのメディア実践活動として、映像制作に加えて、ラジオ放送を取り入れ、学生たちが校内でラジオ放送をするようになっ

た。キャンパス内にラジオブースを設置してもらったことも大きい。ゼミによるラジオ実践の試みは、2005年から2022年まで18年間続いた。また。社会調査実習としても、コミュニティFMをとりあげ、5年間集中的に調査を実施。札幌、函館は、実際に現地調査を実施した。そして、親しい関係が築けたコミュニティFM局やケーブルテレビ局に、ゼミ独自の学生のインターン派遣も試みるようになった。奄美と沖縄に、2008年から2019年までの約10年間で延べ100名以上の学生を派遣した。

2005／「コミュニティFMのアイデンティティ～地域・メディア・自己の連環をめぐるフィールド調査から～」、『社会情報学研究』Vol.9、pp.27-39

2005「有線放送電話のアイデンティティ～〈農村型メディア〉と〈小規模独立メディア〉論の視点から～」、『中京大学社会学部紀要』第19巻第2号、pp.1-82

2007／「コミュニティ放送の事業とディレンマ」、田村紀雄・白水繁彦編著『現代地域メディア論』、日本評論社、pp.135-151

2008／「ラジオの個性を再考する～ラジオは過去のメディアなのか」『マス・コミュニケーション研究』第74号、pp.3-29

2010／「ラジオパーソナリティ論のための予備的考察」『中京大学現代社会学部紀要』第4巻第1号、pp.33-79

2011／「個人と向き合い、社会の変化に合わせ役割を変える“カメレオン”のようなラジオの魅力」、『宣伝会議』no.827、pp.84-86

2016／「地域経済を支える“公共財”コミュニティFMと経営」、中部経済新聞、2016.11.30

2021／「地域メディアが果たしてきたこと、その可能性」、『City & Life』、No.132、pp.8-10

6【転機④：地域の情報化の研究】

※奄美のメディア事業と文化の連環を研究

奄美との出会いは、コミュニティ FM 研究のなかから始まっている。2004年に、大学院生の付き添いで親子ラジオの調査で奄美大島を訪問したのが、奄美との最初の出会である。その時から、南の島の割には妙に影のあるこの島が気になっていた。そんな折り、偶然にも同じ日本社会学会の研究活動委員会のメンバーであった寺岡伸悟氏と奄美の話で盛り上がり、「奄美を研究してみたいね」という方向に話が進んだ。格安航空が就航していない当時は、奄美に行くには鹿児島空港経由で割高の交通費が必要であった。そこで、電気通信普及財団に、「インターネット時代の地域メディア」のテーマで研究助成を申請し、2008年～2009年の2年間の助成を受けることから調査が始まった。

このように、私の奄美研究は寺岡伸悟氏との偶然的雑談から始まっている。ただ、奄美という島との出会い、共同研究のスタートは偶然だが、「なぜ奄美研究だったのか」は偶然ではない。後述するように、私は、それまでの研究キャリアを通じて、「メディアを、特定の地域や文化と連環させてより深く研究したい」という、〈地域・文化・メディア〉の連環を研究する必要があるという課題意識を強く持っていて、その対象地として奄美が一番ふさわしいと戦略的に判断したのである。

〈地域・文化・メディア〉を連環させる研究は、ほとんど先行研究がない。時間と労力がかかることから、ある程度の年齢に達しないとできない研究だからだろう。ローカルの代表地としての名古屋の研究者だからこそ、東京発のカルチュラル・スタディーズではない「奄美から始めるメディア社会学」が可能なのではないか。そして、ある程度情報社会のさまざまな研究を終えて、また学会活動もほぼ引退して、残された時間と労力をかけ、「業績のための研究でない研究」をする余裕もある。

こうして、私自身の奄美研究が2008年からスタートした。最初の予備調査で、前年に開局したあまみエフエムを訪問。さらに、島のメディアの

全域をめぐる旅が始まった。奄美の研究は、単なる地域メディアの業界研究（ラジオなど種別の研究）ではなく、前述したように、地域と文化とメディアの連環を当初から意識した研究である。社会・文化の背景のなかで、人びとがなぜメディア事業を立ち上げるのか、担うのかを、島という範囲のはっきりした分かりやすい社会的世界で描いてみるという試行錯誤を開始した。

そして、その際に、メディアを従来の地域メディア論がやってきたような情報メディア事業に限定せずに、文化を発信する、ミッションをもった人びとの文化表現活動実践の全域として捉えるという拡張メディア論をも展開したいと考えていた。奄美には、奄美学と名乗るほどに郷土の自文化研究が盛んである。だが、私と寺岡氏は、そうした研究者だけを訪ね歩くのではなく、もっと市井の生活文化の担い手に着目してきた。だから、メディア事業者から始まり、島唄・歌謡曲・ポップスなどのうた文化の伝承者や表現者などにも積極的に取材を繰り返してきた。

前述したように、パソコン通信、ケーブルテレビ、コミュニティFMなど、業種の研究を経てきて、そして地方のメディア事業をめぐるうちに、私の中では、〈地域・文化・メディア〉を一体として捉える研究への関心が高まっていた。「メディアは社会的真空状態にあるわけではない」、それと、インターネット研究で到達した「メディアとは自己を仮託する文化装置である」、この二つの命題が、私の地域メディア研究の出発点である。それ故、地域メディア研究者という自覚は少ない。

自己のアイデンティティ形成や醸成が、〈地域・文化・メディア〉の連環のなかで営まれていく。地域のアイデンティティは、そうした自己アイデンティティの集合的な自己という形としてあるのではないか。その後出会った言葉をつかえば、〈自文化の自分化〉の発露が多様なメディア表現、メディア事業の生成につながっていく、そうした連環を研究するということだ。

こうした実験的な研究が可能な対象地は、他にもある。コミュニティ

FMの調査で出会った、帯広市や函館市、伊那谷地域、飯田市、あるいは豊橋市や浜松市、さらには沖縄県でもそうした研究が可能かもしれない。しかし、「島は縁（へり）がある。」。さほどキレもない研究者が1人でコツコツやるには、奄美のような、独特の歴史・文化が強く残っていて、かつそう大規模でもない島嶼域は、わかりやすい。そして、その地域固有の文化と歴史ゆえに、表現するメディアを強く必要とする地域だ。それが奄美を選んだ理由だった。決して南の島が好きとか、島唄のようなルーツ・ミュージックが大好きという理由ではない。

またこの研究で心がけたこと二つある。地域調査というと、まず対象地の行政と関係をもち、役所を入り口にしてフィールドに入っていくケースが多い。そうした回路を徹底して迂回した。また、地元の郷土史研究家や学芸員・知識人などと過度に深く懇意になることも迂回した。行政の目線、知識層の目線から奄美に先入観を持つのではなく、まわりくどいが、文化を媒介する活動をしている多様な市井の人びとを発見し、その方々と語り合うという時間のかかるプロセスを重視したのである。2～3年調査して、まとめ研究を仕上げ業績を積み上げるような安易な関わり方はしない。そう決めて、どこに到着するのかさえも曖昧なまま、年に2～3回の奄美入りを楽しむことを続けた。この息の長い研究というか、奄美との関わりに付き合ってくれた寺岡伸悟氏には深く感謝している。彼とフィールドを旅しながら、地域・文化・メディアをどう理解するかを議論し続けた結果が、「文化メディア」などのアイデアであり、2017年に出した『奄美文化の近現代史』に盛り込まれた幾つかの中範囲の理論フレームである。

奄美の研究は、研究業績を誇るための研究ではないと書いた。少し気取った言い方になるが、ひろい意味での奄美の文化社会史を整理して書くことが、私なりの奄美への感謝と恩返しのもりである。奄美で活躍する文化媒介者たちのために、そして奄美の次の世代の子のためにも思う。また地域メディアを研究する次の世代の研究者への刺激になればとも思う。奄美は、奄美学という知の蓄積があり、市井の人たちが自分たちの歴史・文化

を研究して出版するという出版文化が根付いている島である。そして、奄美本を出し続けている出版社が何社もある。それでも、大学のない奄美で、〈地域・文化・メディア〉の連環の構図や歴史を調べ、書くほど暇で余裕のある人はいない。たまたまそれが可能な立ち位置にいる私が、それを書くことが奄美へのささやかな研究者なりの社会貢献になればと思う。戦略的・意図的に独我論的なメディア論を展開してきた私が、自分の為ではない研究をするのも、奄美のという独特の島が放つ「島酔い」させる魔力からであるだろうし、年齢を重ねた余裕からかもしれない。

〈奄美研究のテーマと研究助成〉

研究助成についても触れておきたい。電気通信普及財団の助成以後、中京大学の研究助成以外の外部資金としては、科研の文化研究の枠で3年間、さらに芸術政策のような分野で3年間を3回連続して獲得することができた。これらは、私の研究蓄積もあるが、沖縄・奄美の芸能研究の第一人者である沖縄県立芸術大学の久万田晋先生に共同研究者に入っていたいたおかげである。人の縁に感謝である。

2008～2009：「地域格差とインターネットによる情報発信の可能性に関する研究」、電気通信普及財団

2009：「地域格差とメディアによる情報発信の可能性に関する研究」、中京大学特定研究助成

2011：「地域メディアの維持活性化と地域文化・地域社会に果たす役割：島メディアを準拠にして」、中京大学特定研究助成

2012：「沖縄・奄美における地域メディアの文化振興・情報発信への寄与に関する研究」、中京大学特定研究助成

2013～2015：「奄美における文化伝承・創生のメディア的展開とアイデンティティ形成に関する研究」、科研基盤研究(C)、加藤晴明(代表)、寺岡伸悟(奈良女子大学)、久万田晋(沖縄県立芸術大学)

2012：「沖縄・奄美における地域メディアの文化振興・情報発信への寄与

に関する研究」、中京大学特定研究助成

2016～2018：「奄美における文化の〈メディア媒介的な伝承・創生〉とアイデンティティ再生の研究」、科研基盤研究（C）、加藤清明（代表）、久万田晋（沖縄県立芸術大学）、川田牧人（成城大学）

2019～2021：「奄美における芸能文化の〈メディア媒介的復興〉と自尊心再生の文化生産論的研究」、科研基盤研究（C）、加藤清明（代表）、久万田晋（沖縄県立芸術大学）、川田牧人（成城大学）

2022～2025：「奄美における民俗芸能文化の〈メディア媒介的な展開〉と持続可能な世代継承に関する研究」、科研基盤研究（C）、加藤清明（代表）、久万田晋（沖縄県立芸術大学）、川田牧人（成城大学）

〈奄美のメディア・文化に関する研究成果〉

2010／「メディアとパトリの島・奄美 -地域からの情報発信とその文化的苗床との連環を焦点にして-」、寺岡伸悟氏との共著、『中京大学現代社会学部紀要』、第4巻第1号、pp.51～139

2011／「メディアとパトリの島（上）（中）（下）」、南海日日新聞、2011.6.22-24

2012／「奄美における地位域メディア研究のための予備考察 -文化・メディア・ローカルアイデンティティ-」、寺岡伸悟氏との共著、『中京大学現代社会学部紀要』、第6巻第1号、pp.77～110

2012／「奄美のうた文化と変化論・序説 -地域メディア論と文化メディア学的視座-」、『中京大学現代社会学部紀要』、第6巻第1号、pp.19～76

2013／「奄美群島・喜界島と文化メディエーター -文化メディア学的視座から-」、寺岡伸悟氏との共著、『中京大学現代社会学部紀要』、第7巻第1号、pp.29～58

2014／「奄美大島の唄文化と文化メディエーター」『中京大学現代社会学部紀要』、寺岡伸悟氏との共著、第7巻第2号、pp.93～126

- 2015 / 「自己メディア論から地域の自己論論へ - 〈地域と文化〉のメディア社会学：その1 -」、『中京大学現代社会学部紀要』、第9巻第1号、pp.1-32
- 2015 / 「奄美・島語りメディアに満ちた島 - 〈地域と文化〉のメディア社会学：その2 -」、『中京大学現代社会学部紀要』、第9巻第1号、pp.33 ~ 66
- 2015 / 「地域メディア論を再考する - 〈地域と文化〉のメディア社会学のために：その3 -」、『中京大学現代社会学部紀要』、第9巻第1号、pp.67 ~ 114
- 2016 / 「奄美の地域メディアを俯瞰する：歴史・印刷メディア編 - 奄美と〈地域〉のメディア社会学：その1 -」、『中京大学現代社会学部紀要』、第9巻第2号、pp.47 ~ 128
- 2016 / 「奄美の地域メディアを俯瞰する：テレビ放送・ビジュアルメディア編 - 奄美と〈地域〉のメディア社会学：その2 -」、『中京大学現代社会学部紀要』、第10巻第1号、pp.41 ~ 102
- 2016 / 「奄美の地域メディアを俯瞰する：島外メディア編 - NHKの奄美番組と奄美映画からのメディア社会学 -」、『中京大学現代社会学部紀要』、第10巻第1号、pp.103 ~ 168
- 2017 / 「ラジオの島・奄美 - 「あまみエフエム」から始まる島の自文化語り -」、『中京大学現代社会学部紀要』、第10巻第2号、pp.1 ~ 70
- 2017 / 「「唄う島」奄美と音楽メディア事業 - 島唄・新民謡・ポピュラー音楽のレーベルを軸に -」、『中京大学現代社会学部紀要』、第10巻第2号、pp.70 ~ 122
- 2017 / 『奄美文化の近現代史 - 生成と発展の地域メディア学 -』、寺岡伸悟氏との共著、南方新社、pp.1-365
- 2019 / 「越間誠と芳賀日出男 奄美と民俗写真の始まり ㊤・㊦」、南海日日新聞、2016.3.30-31

7【転機⑤：文化の情報化の研究】

※地域文化のメディア媒介的な変容を研究（現在）

奄美を研究対象に定めた時から、すでに述べたように〈地域・文化・メディア〉を連環して捉えることで見えてくる地平を模索してきた。「文化メディア学」を提起したのも、そうした連環を強く意識していたからである。地域も文化もメディアも、それぞれ独立して存在するわけではない。とりわけ、メディアは社会的真空状態の中にあるわけではない。その連環を、1人あるいは数人で、分かりやすく、じっくりと研究できる対象として選ばれたのが、「島」であり、「奄美」であった。その半分の到達点が、『奄美文化の近現代史～生成と発展の地域メディア学～』である。この本は、文化の歴史とうたってはいるがメディアを主語にして奄美のメディア総覧を描いたまとめである。より文化を主語にして、文化がメディアとどう連環するかを、奄美という「地域」で問う。それが残された半分の課題である。

文化メディア学というアイデアは、これまでの論考で試作的なアイデア・理論モデル提起してきていた。「奄美のうた文化と変化論・序説 - 地域メディア論と文化メディア学的視座-」（2012）や、「奄美群島・喜界島と文化メディエーター - 文化メディア学的視座から-」（2013）、「奄美大島の唄文化と文化メディエーター」（2014）などがそれにあたる。

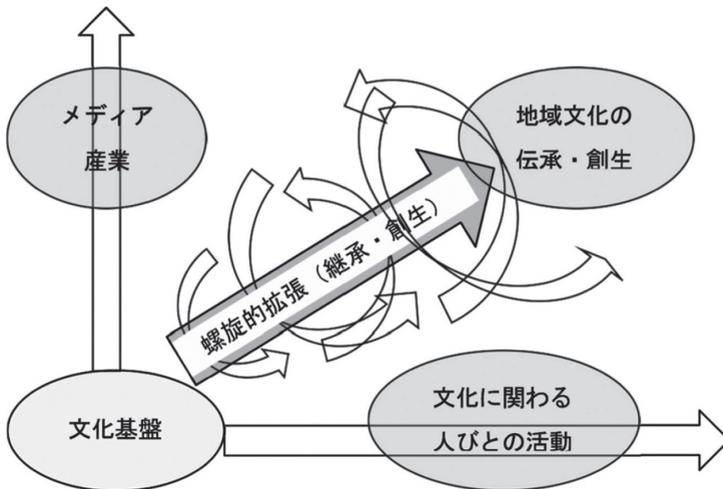
ただ、それらの論考は問題提起に止まり、「文化をどのように研究するのか」についての自分の明確な論点を整理してきていたとは言えない。文化研究の方法との対話と自分なりに立ち位置である文化生産論への到達は、「地域・文化・メディアをめぐる研究方法：文化生産論との対話」（2018）に至ってである。

文化生産論という自身の立ち位置を明確にすることで、次の段階として、まず奄美の島唄の社会史をその視点から解明する作業が始まった。当初、奄美の文化とメディアという研究テーマをひっさげて奄美入りした2008年には、島唄の予備知識は皆無、奄美島唄研究の碩学である小川学

夫氏の名前も知らなかったのである。メディア研究、マスコミ研究、社会学研究、ポピュラー音楽研究で出てくる名前ではないからだ。また、そのころは、民俗学・文化人類学や地域開発研究などを除けば、奄美研究の論考は少なかったように思う。

10年あまりの奄美行きを通じて、ある程度の予備知識や、島唄についての耳慣れもできて、島唄について、「外側から」なら書いても那样的外れしな論考にはならないだろう。そうした発酵を経て始めているのが、その後の「奄美島唄という文化生産」研究のシリーズである。

奄美島唄について、私は沖縄との違いを明確にするため「奄美島唄」、そしてその新しさを強調するため「現代島唄」という言い方を使っている。奄美島唄は、古来から伝統文化として固形的にあったものではなく、比較的最近になって人為的な制度を通じて創造的に継承されてきた。図は、そうした創造的継承のモデル図である（加藤清明、2018、p.64）。



図：文化の生成と発展のための〈表出の螺旋〉モデル

〈生活島唄〉と〈メディア島唄〉や〈固形的伝承〉と〈創造的継承〉という二分法でそうした島唄の変遷を描いてきた。具体的には、新聞社の主

催するメディアイベント、地元音楽レーベルによる論音メディア化、そして全国大会に出場するために組織された日本民謡協会奄美支部（現奄美連合委員会）、そして島唄を教え継ぐ場である島唄教室（公民館講座や個人教室）などの制度化によって奄美島唄は生産されてきた。そのプロセスを個々に描いてみせることが課題である。

奄美島唄については、音楽研究者によってすでに数々の調査かなされ、すぐれた論考がまとめられている。巨星、小川学夫氏も早い段階から島唄の変化（シマ＝集落唄からの離脱）については触れていた。その意味では、私の主張自体は新しいものではない。ただ、それを「文化生産」や、「メディア媒介的展開」という語彙で総合的にまとめていることが、ささやかな新しい試みに過ぎない（加藤清明、2021、p.62）。

個々の先駆的な音楽研究者によって語られてきたこと、あるいは奄美の島唄界やその周辺に位置する人びとの島唄談義のなかで語られてきたこと、それを明確な形の文化の社会史として記述する。それが、私なりの奄美への恩返しであり感謝であると考えている。

2022 現在、録音メディア化についての論考がまだ執筆されていない。それが整った段階で、奄美島唄の文化生産を総合的に論じた一冊（仮題『島唄の文化メディア学～奄美島唄という文化生産～』）を上程するのが当面の残れた研究課題である。

2018／「地域・文化・メディアをめぐる研究方法：文化生産論との対話」、『中京大学現代社会学部紀要』、第11巻第2号、pp1～70

2018／「奄美島唄という文化生産：島唄の教室化をめぐる（1）」、『中京大学現代社会学部紀要』、第12巻第1号、pp41～70

2019／「奄美島唄という文化生産：島唄の教室化をめぐる（2）」、『中京大学現代社会学部紀要』、第12巻第2号、pp33～70

2019／「奄美島唄という文化生産：組織化をめぐる」、『中京大学現代社会学部紀要』、第13巻第1号、pp119～152

2019 / 「ハイブリッド・カルチャーとしてのよさこい」、『第 38 回 名古屋大学企画展 おどる色彩 舞うひびき 記録誌』、名古屋大学大学院情報学研究科秋庭歴史典研究室、pp.8-25

2021 / 「奄美島唄という文化生産：大会化をめぐる試論① - 坪山豊の島唄と〈叙情化〉 -」、『中京大学現代社会学部紀要』、第 15 卷第 1 号

2022 / 「奄美島唄という文化生産：大会化をめぐる試論②・武下和平論 - 「百年に 1 人の天才唄者」の誕生 -」、『中京大学現代社会学部紀要』、第 15 卷第 2 号、pp109 ~ 164

2022 / 「奄美島唄という文化生産：大会化をめぐる試論③・大会の社会史」、『中京大学現代社会学部紀要』、第 16 卷第 1 号、pp1 ~ 62

2023 / 「芳賀日出男を悼む」、南海日日新聞、2023.1.12

8 残された研究課題

文化メディアという視点から奄美の民俗文化や現代文化を読み解く試みは、奄美島唄に限らない。奄美は、「うたの島」であるが、「うた文化」だけをみても現在進行形である。ご当地歌謡曲 = 標準語の島唄ともいえる奄美歌謡（新民謡・新歌謡・奄美歌謡）や、プロからアマチュアまで数多くのユニットが活躍している奄美ポップス界なども、ひろく奄美のうた文化の裾野の景観を彩り続けている。

「うたの島」の全域を、メディア文化という視点から捉え、その文化生成のメカニズムを論じるのが島唄研究の次の研究課題である。南島の民俗文化研究の第一人者であり、共同研究者でもある久万田晋沖縄県立芸術大学教授は、「民俗文化研究には底がない」と仰ったが、まさに地域文化の研究には終わりというものがない。そのせいか、10 年以上かかっても「うたの島」の全景がなかなか描ききれない。

さらに、食・料理（島じゅうりや黒糖焼酎）やクラフト（大島紬）なども、文化生産論や文化メディア学から論じることができよう。さらに、奄美イメージの変遷自体も、それらの視点から論じることができるはず

だ。戦後繰り返されてきた知識人と呼ばれた人びとによる南島イデオロギー言説や島ブームとして描かれたコピー文化の言説もまた、奄美のメディア媒介的表現の形であるだろう。

残された時間やエネルギーと資源は限られているが、大学という制度を離れた後にも、奄美への終わりなき文化メディア研究の旅を続けてみたいと思っている。

補足【教育的なメディア実践のあれこれ】

メディア学は、書籍だけではなかなか理解ができない領域だ。「実践してみなければ分からない」ということで、私自身の研究のため、また学生たちの教育のため、メディアそのものの文法を理解し、社会的な内容を文字ではなく、音声や映像で表現する試みとして、教育の場でもさまざまなメディア実践を行ってきた。私としては、メディア制作それ自体が目的ではなく、どこまでも社会学を学ぶ学生のメディア理解を深め、彼らの文化表現活動の一つとして位置付けてきたつもりである。

1990～1993／パソコン通信ホスト局「きゃんぱす」運営（1200bps／4回線）

1994～1995／パソコン通信ホスト局「Cipher（サイファ）」開局（9600bps／4回線）

1997～2014／映像作品制作※①

【①の説明：映像作品制作（1997～2014）】

ゼミや科目「ブレ全テーション」「映像メディア技法」などを通じて映像ドラマやドキュメンタリーを制作。CBC主催のコンテスト（2009～2011）で各種の賞を受賞した。

2000～／ネット掲示板・ホームページ開始（2001～2014）※②

【②の説明：サーバー設置とホームページ制作】

50代に学習したものがサーバだ。Windows Server2003と2008を購入して、学習した。サーバーとは、要はサーバーというソフトウェアなのだが、まずはそこからスタートし、マニュアル本を片手に四苦八苦したのを覚えている。その後、プログや大学の情報教育システム MaNaBo の活用に転換。

2002～／ミニFM「きゃんぱす放送局／FM きゃんぱす」開局※③

【③の説明：なぜラジオを利用した教育だったのか】

私がコミュニティFMの研究を始めたことで、「ラジオは教育に使える」と確信して始まったのがラジオを取り入れた教育活動である。2010年には改めてその考え方を以下のように整理した

※ ※ ※

〈「アウラ・ステーション」の教育ミッション〉

中京大学加藤晴明ゼミでは、2002年から、ラジオ（音声放送や音声ドラマ作品制作）を教育の中に取り入れてきた。2005年春に大学内の新校舎に「ラジオブース」が整備されたのを機に、昼の定時スピーカー放送局「アウラ・ステーション」をたちあげ、さらに自前サーバによるインターネット配信を開始してきた。よく、大学の放送サークルの活動と誤解される。ゼミの学生の教育活動として実践しているところに、キャンパスラジオ「アウラ・ステーション」の大きな特色がある。

その活動の基本は、パーソナリティ養成やマスコミ人養成のためのラジオ教育ではなく、ラジオを使ったメディア教育であり、社会学の教育であり、さらに一般的にいえば人間力教育にある。また、日常空間に賑わいを与えるメディア・イベント教育、企画力教育の実践の場だとも思っている。学生が毎日放送する番組ひとつひとつが企画であり、社会学的レポートであり、そしてイベント実践であるからだ。

こうしたラジオ活動の原点は、私が小規模独立メディアの研究者として日本中のローカルで小さな町のラジオ局やインターネット放送局を訪問し

ながら、そして、そこで活躍する沢山の素人出身のアマチュア的なパーソナリティと出会いながら、「音声」メディアとしてのラジオが、教育に使えると直感したことにある。

- (1) ラジオ施設は、極めて簡易にシステム構築できること。
- (2) 映像と異なり、コンテンツにライブ感があること。
- (3) 放送での語りを通じてパブリックトークのトレーニングができること。

日本の教育は、沈黙と儀礼的応答を強要してきた。自分の考えや私見を、パブリックな場で、堂々と「声」に出してプレゼンする実践の機会は極めて乏しい。その一方で、インターネット・BBSの世界では、匿名やハンドル名での、暴走的な自己表出＝私語の流出世界は拡大している。

これに対して、ラジオは、パブリックな場で、身体の一部としての「声」を駆使して、自分の語りを人に伝えようとするメディアである。「しゃべるメディア」では、文字で書く以上に、ライブ活動であり、知的な素養と、特異なスキルが要求される。ラジオは、電話のように1人1人に語りかけるメディアでもあり、放送のように不特定多数の人に語りかけるメディアでもある。2年生の秋から3年生の秋にかけての1年間で、ゼミ生たちの表現力が格段に向上し、人前で、イベントの場で、堂々としゃべれるようになる姿を目にする時、改めて、“ラジオを使った教育”の伝道師であり続けたいと思う。

もちろん、インターネット放送局としての「アウラ・ステーション」というウェブ・サイトは、昼のライブ放送だけではなく、ゼミや授業科目で制作されるさまざまな企画作品、ラジオドラマなども、自前サーバからオン・デマンド配信している。「アウラ・ジャーナル」、「アウラサウンド・コンテンツ」など、音声フィールドワークを通じて収集した音やインタビューを組み合わせた企画作品も作って公開している。ぜひ、一度、さまざまな作品に耳を傾けて頂ければと思う。

※ ※ ※

上記のような目的を掲げてラジオというメディアの教育利用を開始し、

やがて学生には、ゼミのカラー自体がラジオゼミとして位置付けられるようになった。そして実績を積むことで、2005年に、豊田キャンパスにラジオブースを設置してもらい、昼の放送「アウラ・デ・ランチ」を開始した。当初の放送時間は25分、やがて20分で放送。内容は、ジャーナル・サブカル・カルチャー・音楽・パーソナリティ・スポーツなどのテーマに別れて放送した。

2003～／オープンキャンパス・大学祭・日進市民まつりでミニFMイベント開催

2005～／ラジオブース整備「アウラ・ステーション」開局（2005～2019まで15年間）

2005／インターネットラジオ配信（自前サーバ利用）※④

【④の説明】

インターネット配信、つまりストリーミング配信を試みた。まだYouTubeやユーストリームなどのプラットフォームが開始される前で、自前のパソコンを配信サーバーとして配信した。ストリーミングの原理や技法と格闘した時期である。やがてユーストリームで配信が可能となり一定の期間配信を続けた。音楽をネット配信できないため、学生が番組と効果音を手動で切り替える方法をとらざるをえなかった。

2006／2019／コミュニティFM・ケーブルテレビへのインターン派遣（奄美・沖縄・北海道）

2008～2022／ラジオ・コンテンツ制作

2008／お台場のネットラジオ Radio Japan の連携プロジェクト

2008～2022／ラジオドラマ制作

2018／社会教育施設「豊田市地域文化広場」の活動紹介 YouTube 発信（ちぶんTV）

2019／松平地区の観光マップ制作

2020／地元ローカルラジオ局エフエムとよたの番組づくり（毎週30分番組を制作）※⑤

【⑤の説明：エフエムとよたの番組づくり】

2020年度は、コロナ禍のため5月から1人の学生が自宅で番組制作。その模様はNHKのドキュメンタリー「コロナ禍のRadio」として年末に全国放送された。制作は、2021年度以降は、AVスタジオで班に分かれて制作。2022年9月番組まで制作して終了。

補足【調査実習 1996～2022（社会調査論⇒社会調査実習のあれこれ）】

通常のゼミ活動以外に、1996年からゼミ生の有志でメディア文化に関わるテーマでの調査研究を実施し、報告書をまとめてきた。「メディア文化」という語彙が新鮮で、かつ珍しかった時から始まり、途中、社会調査士の資格科目である「社会調査実習」という形をとった。この学生たちによる文化とメディア研究と報告書発行は定年までの27年間続いた。

第1号 『電子ゲームの文化～人は電子メディアで何を消費しているのか～』

第2号 『電話コミュニケーション～若者はなぜ電話するのか～』

第3号 『電子ゲーム世代～僕たちはゲーム第一ジェネレーション～』

第4号 その1・その2

『音楽・メディア・こだわり～歌詞の中の現代社会～』

第5号 『メディア・フレンド～“愛”と“失望”のネット恋愛～』

第6号 『メディア文化の饗宴』

第7号 『変身というメディア行為』

第8号 『携帯電話のコミュニケーション』

第9号 『メディア・リテラシー』（未刊）

第10号 『マイ・テリトリー～農村メディア調査と8つの「居場所」の景観』

第11号 『愛知万博の社会学～近くに〈祝祭メディア〉がやってきた！～』

第12号 『ディープ・アイデンティティ～“ハマる”人間の社会学～』

- 第13号 『音声メディアの可能性～サウンドスケープによる音声コンテンツ制作～』
- 第14号 『ディープ・アイデンティティ～“ハマる”人間の社会学～ Part. 2』
- ※第15号からは、社会調査実習報告書として刊行
- 第15号 『ラジオの未来を考える』
- 第16号 『ラジオパーソナリティ研究』
- 第17号 『ラジオ CM 研究』
- 第18号 『ライフワークとしてのラジオパーソナリティ』（札幌で実習）
- 第19号 『仕事としてのラジオパーソナリティ』（函館で実習）
- 第20号 『映像の中の奄美・生活の中の奄美』（加計呂麻島・奄美大島で実習）
- 第21号 『〈奄美うた〉の歌詞世界』（与論島で実習）
- 第22号 『写真の中の奄美・生活の中の奄美』（奄美大島で実習）
- 第23号 『SNS の中の奄美』（奄美大島で実習）
- 第24号 『奄美音楽図鑑①』（奄美大島で実習）
- 第25号 『奄美音楽図鑑②』（※研究室資料）（コロナ禍で現地実習なし）
- 第26号 『奄美音楽図鑑③』（※研究室資料）（コロナ禍で現地実習なし）
- 第27号 『映像の中の奄美』（加計呂麻島・奄美大島で実習）